

「お父さん、愛しています」

キム・ソンムク著

一九九五年に韓国で始まった「父の学校」は、またたく間に全世界に飛び火し、卒業生は十万人を数えようとしている。

著者キム・ソンムク氏は、この「父の学校」に草創期から参加し、自らの家庭が180度変わり、その感謝からこの運動に献身し、懸命に準備をして講義を担当し、文字通り全世界で用いられている。それまで聖書についても家庭についても専門的には学んだことがなかったというのが驚きだ。

私自身、「父の学校」横浜2期に出席してキム氏の講義を何度か聞き、引きつけられるものがあったので、本書が出版されたと聞いてすぐに注文した。内容は期待に比べて余りあるものだった。

日本航空、国際航運などに長年勤務し、社会的には成功していたが、家庭は破綻寸前まで行っていた。直接の原因は、キム氏本人の浮気だった。

「離婚」ということばを妻の口から聞いて初めて、事態の深刻さに遅まきながら気づいた。二人が離婚を思いとどまった一つのきっかけは、「ママ、僕はママもいいけど、パパも必要だよ」という、息子の涙ながらの妻へのことばだった。

姉の勧めで十年も教会に通っていたが、イエス・キリストは知らなかった。期待もなく参加した修養会でそのことに気づかされ、悔い改めに導かれたというキム氏。

通っていたオンヌリ教会で一九九五年に開催された「父親再教育プログラム」に参加した。これは、アメリカで一世を風靡した「プロミス・キーパーズ」にヒントを得たものだった。これがキム氏のニーズにピッタリと合った。

「(もっと早く知っていたら、こんな愚かな生活はしなかつたらうに……)」

後悔が押し寄せてきた。男であることを振りかざし、自分が愛し尊ぶべき家族にしてしまった見えない暴力に対して、心から悔い改めずにはい

られなかった」

男性、父親だという権威を脇に置いて、夫として大切だと思うことをし始めた時に、奥さんの表情も変わってきた。

「あなた、何か地獄から天国に引っ越してきた気分だわ。今までなんでこんなに胸を痛めながら生きてきたのかしらと思うの」

これほどに父親を変えてしまう「父の学校」とは、何を教えているのか？

その一つは、「多くの父親たちはまちがった文化に生きている」ということである。「まちがった文化」とは、以下のような事柄である。

メンツ文化ー 人には親切だが、肝心な家族には無愛想。

同じアパートに住む人の家のゴキブリは退治してあげた主人に、奥さんが「あなた、うちにもいっぱいいるのよ」と言ったら、「家のゴキブリは、お前が退治しろ！」と命令したという。

仕事文化ー 「仕事をして稼いできたら、それでいいんだ」という思い込み。

酒文化ー キム氏は、肝硬変になるまでお酒を飲んでいて。

性文化ー 「浮気は男の甲斐性」という考え。

レジャー文化ー 家族をほったらかして、余暇を自分一人で使うわがまま。

暴力文化ー 「最後は暴力で黙らせる」という論理。

もう一つのテーマは、「代々受け継がれる悪影響は自分の代で断ち切り、良い影響力を次代に残さねばならない」ことである。著者は言う。

「自分が父から受けた影響がどのようなものであるかを話してみるようにと促すと、初めはみなが躊躇する。それは、一度も他人の前で父親の話しをしたことがないということもあるが、もう一つは、父に対する記憶があまりないからである。この二つの理由を深く探してみると、父に対する苦々しい記憶が胸の奥深くに居座っていることが多くある。そのため一度も他人に父親の話しをせず、いつも記憶の向こう側へ押しやろうと努めていたのかもしれない。

父親に対する記憶、胸が痛む記憶を吐き出そうとする時、彼らは大変苦しむのである」

そんなにまでして父親が本来の役割を果たすべきなのは、それだけ父親の影響力にはすばらしいものがあるからだ。

最後の章は、「お父さん、あなたは愛を表現するとき、もっとすばらしい」である。お父さんが愛を表現する方法には、どんなものがあるのか？ それは本書を手にする時のお楽しみとして残しておこう。（編集部一前島常郎）

（B6判、並製、316ページ、DURANNO発行）
本書は、ファミリー・フォーラム・ジャパンでも扱っております。